

和歌山病院での実習を終えて



川部 直子

和歌山病院での実習は二日間という期間でしたが、とても濃密な経験となりました。

まず、結核の感染制御について知ることができました。以前授業で勉強してきたものの、結核といえば不治の病であり、結核病棟に入ると出るのは難しいという古典的なイメージを持っていました。しかし、陰圧室の気流のコントロールやN95マスクの装着方法など、結核病棟の見学を通して、改めて結核というものは治療可能な、身近にあるものとして感じる事ができました。

鼻カニューラや酸素マスクなどの呼吸補助機器などに初めて触れ、実際に装着することで患者さんがどのように感じているか、その一端を知ることができました。残りの期間のポリクリは患者さんの使っている呼吸補助機器についてもっと気をつけようと思いました。

胸部X線画像についての講義は、どうして黒と白の境界線が形成されるのかという根本的な所からはじまり、構造物が接していてもシルエットサインができない例もあるという、脳内がぱっと晴れ渡るような講義であり、解りやすくパズルを解くような面白さがありました。また、肺の区画はとても覚えにくいと感じていたので、ブロンコ体操をみっちり教えてくださったことに感謝しています。

南方院長とのお食事中に伺った御坊市の歴史についてのお話も興味深く、御坊という土地への親しみが湧きました。地域の歴史を知ることはそこにいる人を知ることにつながり地域医療につながっていくのかもしれないと思いました。また、個人的な相談に応じてくださっただけでなく、ご馳走して頂き有難うございました。

この期間中、とにかく先生方や職員の方々の気遣いや熱意を感じることができました。この姿勢は将来自分が教える立場になった時に引き継いでいかなければならないと思いました。頂いた三鈷松の葉を時々見てこの二日間のことを懐かしく思います。

南方院長、駿田副院長をはじめ、病院の職員の皆様方、お忙しい所我々を温かく迎えてくださりありがとうございました。改めてお礼を申し上げます。